

「若菜」巻についての一考察

—女三宮物語における基本的問題の再検討—

武原弘

一、はじめに

源氏物語第二部の物語は、光源氏・女三宮・紫上・柏木の四人を主軸として展開する物語であるが、その主流は女三宮事件の物語—前半の女三宮降嫁の事件と後半の柏木密通事件—の推移展開の中に求めることができる。それは、「源氏と朱雀院と紫の上と柏木衛門督と女三宮との心理的葛藤の上に、綿密に組み上げられた二重の三角関係によって語られてゐる」^{〔1〕}ものであるが、ここで留意せられることは、この女三宮事件と呼ばれる一連の物語が単純に女三宮を主役とする悲劇として統一的に把握されにくい要素を物語構造自体が含んでおり、前半における物語が女三宮の降嫁事件を中心としながらも、源氏—女三宮—紫上の三角関係による危機的情況はむしろ紫上を中核として語られていく形となっていることである。情況設定の一端を担う人物として女三宮の役割は重要であるが、紫上をめぐむる悲劇的情況の深刻さ、その内面的苦悩の重みにかげられた描写の比重は、女三宮のそれをはるかに超えているかの如くである。これ

をさらに、後半の柏木密通事件の物語における女三宮の重要性、その造型の深まりの問題と関連させながら、女三宮物語の全体像を把握しようとするとき、その主題や構想についても、女三宮の人物像についても、さまざまの問題が生じてくるのである。それらは、第二部の悲劇性の問題とか、女三宮物語の基本構造の問題に関する極く基本的な問題点なのであるが、私は、「若菜」上下巻の作品分析の立場から、それらの問題についての再検討を試みたい。私の問題としては、女三宮物語の全体的統一的把握—女三宮の降嫁事件と柏木密通事件とを連結し統一しているところの作品形象としての要因と必然性の探求—という点に主眼があるが、以下、物語の展開に即して問題点をあげ、各章ごとにそれについての考察を進めていくことにしたい。

二、紫上の苦悩と女三宮

女三宮の降嫁に始発した紫上の悲劇的世界とは、いかなる意味と構造をもつものであったか。

「若菜」巻についての一考察 —女三宮物語における基本的問題の再検討—

まず「若菜」上巻の冒頭で、出家を決定した朱雀院にとって唯一最大の絆となつた鐘愛の姫女三宮が紹介されている（一五〜七ペ）。院はこの「いはげなく」「幼く」「おぼつかなく」「心もとなく」性格の弱い女三宮の将来を憂慮し、安心して宮の後見を依頼できる婿がねの選定に苦慮を重ねた結果、最終的に、光源氏を姫宮の配偶者と決定し、源氏もそれを承諾する（一八〜四〇ペ）。この女三宮の登場から六条院への降嫁までの情況描写は、殆ど諸人物の長い会話を通して、源氏と女三宮の結びつきを必然的のものとして説得するためのさまざまの条件・情況の積み重ねを見せ、第一部の物語の手法とは明らかに異質的である。その物語の質的方法的「転換」については、既に秋山虔氏、野村精一氏をはじめ諸氏によるすぐれたご指摘があるので、いまは詳述しない。

女三宮の降嫁は、言うまでもなく、紫上に非常な衝撃を与えた。それまで源氏と紫上との緊密な結びつきを頂点として安定した秩序を保ち、「生ける仏の御園」として栄えていた六条院が、女三宮という新しい人物の介入によってゆれ動き、崩壊への危機に直面したわけで、本文はその事件の意義と情況の展開を紫上の苦悩の深化過程の裡に集中的に表現しようとしている。特に、紫上の存在を全く無視して盛大に行なわれる降嫁の儀式（四九〜五〇ペ）あたりから紫上の深刻な内面的苦悩が精密に描き出されてきている。そして、その文体は著しく場面的抒情的なものとなっている。たとえば和歌の挿入であるが、この巻の冒頭以来特徴的だった散文文体（今井源衛氏によれば「抒情を極度におし殺した息の長い説得的な散文」）による文体とはうらはらに、ここには豊かな抒情性が見られる。

源氏を宮の許に送り出して孤園の寂しさと嫉妬に身悶えする紫上の詠歌「めに近くうつればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな」（五一ペ）には、紫上の悲歎の心情が深々と詠出されており、野村精一氏が「常にその散文によって形成されて来た状況との緊密関係の上にもみその情念の烈しい動態をこよなく表出し得る」源氏物語歌の典型をここに見出され、「紫上の極限的な心情」の「独白」「絶唱」とこれを評されているのは、まことに示唆に富んだご指摘である。

このような、きわだった対照にある文体の累積と反復によって、そこに確実な形象を見せるものは紫上の暗い、苦悩にみちた内部世界であるが、その描写の精密さと豊かな抒情性とがここにおける物語の主題を紫上の悲劇的世界の裡に求めさせるのであって、女三宮は殆どその背後に影のように見えるに過ぎない。一方、紫上は、そのような烈しい嫉妬と苦悩を自ら抑制し、これを超克する（五三〜四ペ）。当初予想された三角関係は遂に破綻を見せることなく、事態は円満に推移するのである（七二ペ）。このような紫上の自己抑制から、女性人物としての理想性が指摘されるのだが、いまは人物論としての紫上論に深入りする余裕がない。

さて、以上は女三宮降嫁をめぐる物語の前半の極端な素描であるが、森一郎氏は、この前半における紫上の苦悩の意味をきわめて重視され、これを前半の主題と目されている。そして、物語のこまごまでの推移を見て「女三宮登場の意味はこれで一応完結していると思う」とか、「女三宮を新しく物語に登場させた意味はむしろ主として物語前半にあるのではないか」と論じておられる。氏は、女三宮降

嫁事件の主題性は後の柏木密通事件の主題とは別のものであるとの立場に立っておられるのである。小町谷照彦氏もこの点に触れ、紫上をめぐる悲劇は一応結着するが、女三宮物語はまた別の主題によって展開する。それは柏木との密通事件である」と述べて、森氏と同じ立場からの見解を示しておられる。

既に見てきた如く、このような見解を生み出す要素は作品自体の中に確かに認められるのだが、にもかかわらず、私はこのような見解には全面的には賛じ得ない。何故なら、女三宮をめぐる一連の物語をあまりに簡単に裁断してしまうことによつてもたらされる欠落もまた大きいと思われるからである。私が最も不満とする点は、紫上と女三宮（源氏を含めてもよい）との関係が一応円満に保たれるというところを、直ちに女三宮登場の意味の完結、あるいは紫上の悲劇の結着と見なされる点である。私見によれば、その円満とは決して事態の完結でも結着でもない。むしろ、その円満さの中に微妙な昂進を続けていた悲劇的世界の内実が明らかにされなくてはならない。

女三宮降嫁後の物語は、一応の円満な関係を保っている紫上と女三宮とを中心に、そこにさまざまの挿話的な話題を併合して展開している。そこには、女三宮と紫上との対照的な女性を対比的に描き出すことによつて実体化される六条院の悲劇的情況が徐々に明らかにされる方法が見られるが、紫上の出家志願（一二九ペ、一三七ペなど）や突然の発病（実は突然ではないのだが、この点については後述）（一六五ペ）は、そのような悲劇的情況の深化過程を経て発現するものであってこそ、重要な意味をもつのである。即ち、紫

上の苦悩の問題性は、表面上の一時的な円満関係の実現にもかかわらず、本質的には完結していなかった。それが紫上の出家志願、発病という形で顕現したのである。その紫上の悲劇の深化過程において、女三宮の果す役割は依然として大きかった。紫上の悲劇にとつて女三宮の登場は不可欠の条件であったが、同時に私が注目しているのは、それほどまでに重大な意味をもつ女三宮とは如何なる人物であったか、女三宮の世界とは何か、という点なのである。

思うに、紫上がつくり出した三者間の円満とは、宮の降嫁が六条院に投げかけた現実を直視するに耐えられなかった源氏と紫上との虚構の世界に過ぎない。勿論、この虚構を正当化、合理化するため、作者はいくつかの条件を用意してはいる。源氏と女三宮の結婚が当人相互の愛情から発したものでなく、朱雀院の依頼に対する義務的現実処理の行為として成立したものであったこと、あるいは、女三宮の出自・身分は紫上のそれに比してはるかに高貴であり紫上はそれに対抗すべくもなかったこと、さらには、女三宮の年令は低く人柄も幼稚で競争相手としての脅威的存在ではなく、紫上も對抗意識をもつ必要がなかったことなど（本文引用は省くが、これらについて紫上自身がよく納得していたことを示す叙述、四三ペ、五三ペ、七二ペなども見られる）。しかし、これらの条件にもかかわらず、紫上の内面に刻みこまれたあのしたたかな苦悩が、その円満の虚偽虚妄の本質を端的に示しているのである。紫上は、あらゆる合理化正当化にもかかわらず、源氏と女三宮の結婚が本質的には源氏の色好み、に他ならないことを熟知していたのである。源氏が女三宮の降嫁を承諾した真意は、女三宮が藤壺女院の姪であったことに因

していた(三四八頁)。紫上の女三宮に対する嫉妬、苦惱はこの点に重大な関わりをもっていたのだ。そのことは後で紫上の危篤状態のさ中で登場する六条御息所の死霊の語るところからも明らかに示されている(一八二、四頁)。光源氏の色好み——それは第一部においては光源氏の理想性を示すものであったが、第二部に至って紫上にもたらず苦惱の深さを通して否定的に扱われようとしており、明らかに「色好みのもらるの解体」(野村氏)が見てとられる。第二部における源氏の色好みは四十代の円熟した虚構で表面的には美しく装われていたが、その虚構の背後には、源氏への不信と愛の亀裂に悩む真実の世界が、紫上の内面の暗部として見据えられていたのである。

このように見てくると、一時的な事象の円満な推移は、紫上の悲劇的世界の完結と必ずしも関わらないものであることが明らかになつたかと思われる。そしてさらに重要なことは、このような紫上の悲劇における決定的条件を担った女三宮が、その役割を依然として直接的に担い続けているということなのである。

三、四年間の空白と女三宮

「若菜」下巻のはじめに、「はかなくて年月もかさなりて、内裏の帝御位に即かせ給ひて十八年にならせ給ひぬ」(一二七頁)とあって、前後四年間にわたる歳月が経過しているものとされている。しかも、この四年間の空白という時間の経過によつても、物語における事態の根本的变化は認められなところから、この空白が何の

ために設けられたのか、その意味が従来から問題視された。一般的な見解としては、たとえば大朝雄二氏の見解にもあるように、この四年間の時間の空白は、柏木や女三宮の上に直接関わるものではなく、源氏の老いと紫上の発病とをもちたすために用意された時間の確保であったとされている。特に、「今年は三十七才にぞなり給ふ」(一四三頁)というように紫上の年令を明記していることも関連して、紫上の発病をもちたすための時間の経過(三十七才は女の重厄の年である¹⁰)の必要上と見て、ほぼ妥当であろう。

しかし、紫上の病氣は柏木と女三宮の密通事件の直接的契機となつたのであるから、この四年間の空白が女三宮と全く無関係であり得るわけではない。事実、この四年間は源氏と紫上の上に流れた歲月であると同時に、最も端的には女三宮の上にいち早く流れた歲月である。このことは本文の叙述に従つて再確認されなくてはならない。

四年間の年月の経過は、明らかに女三宮の六条院における立場と位置を強化拡大させるものとして作用するものであった。本文は、六条院における女三宮の生活場面をさまざまの角度からとりあげながら、そこには、四年前とはちがった、成長した重みのある女三宮を描き出している。いささか本文を辿つてみよう。先の四年間の空白と冷泉帝の讓位に関する記述の後、本文は紫上や明石上一派を伴つた源氏の住吉詣での場面に移る(一三二―一六頁)。それは表面的には依然変らぬ六条院の華やかな世界の提示に他ならないのだが、その満ち足りた華麗さの中に、一条の陰影が確実に刻みつけられている。紫上の苦惱と出家志願についての叙述である。

「対の上、かく年月に添へて、方々にまさり給ふ御おぼえに、わが身はただ一所の御もてなしに、人にはおとらねど、あまり年月つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、然らむ世を見はてぬ前に、心と背きにしがな。……(中略)……渡り給ふ事、やうやう等しきやうになりゆく。さるべき事、道理とは思ひながら、さればよ、とのみ安からず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過し給ふ。」(一三七〜八ペ)紫上を突如として襲う漠たる不安、光源氏の愛に対する止みがたい不信などが出家への志をかき立て、それとは対照的に徐々にその立場を強化し、源氏の愛を獲得しはじめた女三宮の安定性がある。紫上はいま、微妙ではあるが確かな地すべり、(秋山氏)にある自分を感知しているのだ。次いで場面は、源氏が女三宮に琴の教授に当る場面へと転ずる(一四〇〜三ペ)。ここで、「心もとなくおはするやうなれど、やうやう心得給ふままに、いとよくなり給ふ」(一四一ペ)と、女三宮の琴の技能の成長ぶりが描かれ、源氏も人繁き昼間をさけて夜の静かな時を選び「対にも、その頃は御暇聞え給ひて、明暮れ教へ聞え給ふ」(同)とあるように、源氏と女三宮の仲睦まじいおちついた生活が細かく描写される。特に、源氏と女三宮との琴に関する談話の場面(一四二ペ)には、琴を媒介とする二人の信愛がよく表現されている。さらに次いでは、春の黄昏に溶解してしまうかの如き絢爛華麗にして艶美な女楽の催しが、長い描写で叙されることになる(一四三〜五八ペ)。やがて春灯に映える女たちの艶姿、停滞した濃密な時間の推移、情趣美の極をなす音曲と舞と——高橋和夫氏がこの場面に、平安朝貴族社会の頹廢美・本格的ニヒリズムを見てとられたのはまこと

「若菜」巻についての一考察 — 女三宮物語における基本的問題の再検討 —

とにすぐれたご批評だと思いが——このような六条院の美的生活の場で、「二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見え給ふ。桜の細長に、御髪は左右よりこほれかゝりて、柳の糸のさましたり」(一四八〜九ペ)との比喩で描写されている女三宮の姿は、いまだ熟さない初々しさをたたえているとは言え、六条院の女として他の美しい女たち(紫上や明石上など)と対等に競い合うように美しく成長した宮を印象づけている。女三宮の成長を喜び語る光源氏(一五八ペ)とはうらはらに、紫上の心中は一層暗れない。本文は再び紫上の内面的暗部を隈取るうとして(一五九〜六二ペ)。そしてついに、女三宮と同衾する源氏を送り出した直後、紫上は発病した(一六五ペ)。紫上の、対女三宮との確執がもたらした悲劇の極みがこれである。

私が長々と辿って見た本文の叙述展開から明らかに指摘できることは、紫上をめぐる暗い悲劇の内面世界の深化と、女三宮をめぐる明るい安定した外面世界とが、徐々にしかし確実に両者の対比の中におかれ、物語展開の過程を通してその対比が次第に重要な意味を担いつつ進行していることである。紫上と女三宮との対比に集中的に見出される世界とは、外面的な華麗さと円満さがその内面にはらんでいた悲劇的葛藤の世界である。これこそが六条院という虚構に満ちた世界の実体を示すものであつて、悲劇とはこの矛盾に満ちた世界構造そのものを意味するのである。石田稔二氏が「四年間の年月は実感としてわたくし達には感じられない。不思議なことに、本質的な事態はすこしもかはつてゐない

からである」としながら、「たゞ此処で、わたくし達は、女三宮と紫の上が、ほゞ六条の院の世界を等分した事を知らされるのである」⁽¹²⁾と述べられたこと、また大朝雄二氏も「物語では、その紫上と寂寥と対照的に、現実的にはつきりした支えを持っている明石上と女三宮の占める位置が徐々に重くなつて行く様子が語られてくる」と述べられたことは、四年間の空白後における女三宮の描写を重視されるが故の、貴重な指摘でなければならぬ。文中、女三宮の年令に関する次のような記述がある。「二十一二ばかりになり給へど、なほいといみじく片なりに、きびはなる心地して、細くあえかにうつくしくのみ見え給ふ」(一四三べ)。この叙述に、紫上に比してあまりに未熟な女三宮であつたにもかかわらず、女としての肉体的魅力をようやく発揮しはじめてきた宮の成熟を感じるの、おそらく私一人ではあるまい。

このような女三宮の重みが、降嫁及び降嫁後の数年間の生活の中で、一時的な均衡もものは、ひたすら自己抑制に努める紫上の内面世界を徐々に侵蝕し続けていき、その決定的破局として紫上の発病、柏木による女三宮密通の事件がもたらされるのだが、私がここで強調したかったのは、そのような悲劇の破局の情況は、決して突如として生じたものではなく、長い過程を経てきた必然の出来事であつたこと、また、そのような過程そのものが物語の叙述で多くの部分を占めているところから、女三宮の悲劇も紫上の悲劇も、その全過程の裡にこそ把握されるものでなければならないことなのである。

ここで、私は女三宮の性格について言及しておかなくてはならな

い。

女三宮という人物は、その登場の時点から、「幼し」「若し」「いはけなし」などの詞で表わされるように、きわめて未熟な、幼稚で頼りない人柄の人物として造型されていた。六条院への降嫁の時源氏の宮に対する第一印象「姫宮は、げにまだいとちひさく、かたなりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若び給へり」(五〇べ)には、源氏の失望が明らかに見てとれる。このような人柄の女三宮を評して、「ほとんど独立した性格をもたない……白痴的に明るい世界の住人」(今井氏)、「無性格、人間的に空虚」(野村氏)「虚像的女人像」(深沢氏)などと規定するのは諸説とも一致している。かかる女三宮造型の意味と意義については、諸説あるが、「光源氏の色好み人物としての理想性の深化と、紫上の内面的深化を形象化するための媒体」(森氏)、「六条院の自壊と自滅の悲劇の拡大と深化のための必須条件」(深沢氏)という見解が代表的なものであろうかと思う。⁽¹³⁾さらに、女三宮のかかる人物像は、物語の推移展開において殆ど一貫して変化しない。少くも、密通後出家を志願する条まではそうである(一四三べ、一四八べなどを参照)。あの蹴鞠の場面における垣間見から破局的密通に至るまで、柏木と女三宮の事件の経緯全体で、有力な要因となつたのも、女三宮のこのように空虚で幼稚な人柄であつたのだ。かつて石田穰二氏が、柏木と女三宮についてすぐれた思弁的考察を施こされ、「全く普遍的な、精神のひとつの主題、その奇態な輪廓をひく事だけしか可能でなかつた、原質そのもののやうな思想の姿」「宮

といふ一箇の想念」「精神が……裸形の儘の生の原塊を見せた」
「内面のドラマ」と論ぜられたのも、⁽¹⁶⁾ 柏木及び女三宮の造型における極端な抽象性に触発されたものであらう。

このような女三宮像の捉えかたは、私にとつても確かに魅惑的だし、作品の主題論に関わるるとき確かな妥当性をもつものである。が、にもかかわらず、そのような女三宮論は、女三宮という人物の総合的な把握ではないように、私には思われる。たとえば私が既述したところの、降嫁後の六条院における女三宮の現実にもつわる長大な叙述と女三宮造型の深化過程とは、一体何であつたのか。女三宮の六条院における生活者としての現実的立場の強化、六条院の世界を紫上と対等に分割してきた女三宮の現実的情況など、四年間の空白の歲月の推移が女三宮の上にもたらしたところの意味をこで全く無視することは、女三宮物語の悲劇的世界の本質を把握するために、重大な過誤となるのではなからうか。

私見によれば、既述した如き女三宮の白痴的な幼稚さは、そのまま女三宮の性格として、実体のある人物描写として、把握されなくてはならない。勿論、そのような女三宮の幼稚な性格が、老成と円熟の飽和に達していた六条院において特異な存在であり、その人間関係に様々な波瀾をもたらすものであつたことの重要性は軽視すべきではない。しかし、より重要なことは、そのような性格をもつた女三宮が、六条院に登場し、錯綜した人間関係の中でさまざまの確執と軋轢を造りながら、一人の女人として生き、悩み、目覚めていく全過程に注目することである。この視点に立つとき、女三宮の人物像を無性格と規定することはできないし、虚像とも媒体とも規定するこ

とは不当に思われる。物語の展開に伴つて、そのような女三宮像の造型はだいに確かさと深まりを増しており、その意味では重要な実像としての人物像を明確にできてきているのである。この女三宮像の造型の深まりは、紫上や柏木の悲劇の深化拡大の過程と等価であり、前者を無視しては後者の考察も不可能である。

四、柏木事件と女三宮

柏木密通事件は、女三宮事件の物語のいわば悲劇の頂点として、従来から大きく扱われてきた。にもかかわらず、しばしば指摘されるように、この密通事件は物語の構想上、前半の女三宮降嫁事件の自然な展開として描かれてはならず、むしろ事件の唐突さ不自然さが目立っている。「若菜」上巻及び下巻はじめまでの物語の展開において、後半の柏木と女三宮との密通事件が現実に行ふことを明確に予想させる要素は殆ど見あたらない。加えて、密通の場面に直接する条で、「まことや、衛門の督は中納言になりにかし」（一六九ペ）という発語を伴つた柏木の登場ぶりは、いさう事件の唐突さを感じさせるのであつて、主題論においても構想論においても、この点が問題となつてゐることは既に触れておいた。確かに、前半からの物語叙述の中に、一見伏線と覺しきいくつかの叙述を指摘することはできないわけではない。たとえば、上巻の終りに叙された蹴鞠の場面で、夕日に光る女三宮の艶姿を垣間見た柏木の眼底に焼き付いて消えることのなかつた宮の面影。柏木の女三宮に対する炎のような恋慕がその時はじまつてゐるが（一一〇〜一

七ペ)、この場面は印象的で、その濃密な描写は効果的である。

また、女三宮の無思慮な、幼稚な人柄が一貫している点、密通事件の直接的契機ともいうべき紫上の発病などは、密通事件に深い関連をもつものである。しかし、蹴鞠の日から密通まで問題の四年間をばさんで約六年間が経過していることを見ても、柏木の熱情もさることながら、その長すぎる持続はやや不自然である。その間における柏木の恋情について、本文には一行の叙述もなかった。やはり、この密通事件の叙述は唐突の感を免れ得ない。この事件が六条院にもたらす決定的破局の意味が重大であるだけに、物語構想における不自然さ、不徹底さはやはり看過できない問題であろう。

しかし、私はここで考察の視点をやや移動させてみたい。私の問題は、女三宮自身にとって柏木との「密通」とはなにか、少くも、本文の叙述に即してみて、なんであったか、という点にある。

「宮は、いとあさましく、現とも覚え給はぬに、胸塞がりて思しおぼほるるを：(中略)：げにさはたありけむよ、と口惜しく、契心憂き御身なりけり。院にも今はいかでかは見え奉らむ、と悲しく心細くて、いと幼げに泣き給ふ(一七六ペ)。「これは深き心もおはせねど、ひたおもむきに物懼ちし給へる御心に、ただ今しも人の見聞きついたらむやうに、まばゆくはづかしく思さるれば、あかき所にだにるざり出で給はず、いと口惜しき身なりけり、と、自ら思し知るべし(一七九ペ)密通後における女三宮の心中描写であるが、ここには、柏木との密通が女三宮にとって全く不慮の過失(むしろ災難)であったこと、源氏をはじめ他人に事が発覚したときのことを想って女三宮が怖れおのいている様子が描き出されてい

る。特に、源氏に対する女三宮の畏怖恐懼の思いは日毎に深まるばかりで、以後の本文は、柏木と女三宮のそのような不安と恐怖に充たされた悲劇の内面を精細に追いつけていく。その悲劇の極まるどころに、女三宮の病氣と出家(一八九〜二九九ペ)、柏木の病臥と死(二一八〜四六ペ)がある。

密通後の女三宮の源氏に対する恐懼の心理は、宮の兎めかしい人柄とも相俟って、一応自然な感情として受けとられるものだが、密通という浪漫的悲劇的行為にもかかわらず、女三宮が思惟するものはきわめて現実的具体的な人間関係の問題であったことは注目されなくてはならない。真実の愛とは何か、理想的純粹愛とは何か、という問いに関わることなく、女三宮は、現実の人間関係(たとえば源氏とのこと)について集中的に思念する。このことは、六条院における女三宮が、現実的な生活の場にあつていかに緊密な、深い人間関係を生きていたかという、いわば女三宮の現実情況の重さをそのまま如実に示しているのである。より具体的には、源氏の女三宮に対する愛情の深まりという現実的情況——「この宮をばいと心苦しく、幼からむ御女のやうに、思ひはぐくみ奉り給ふ(二三九ペ)」という当初の父性愛から、女三宮の成長につれて夫夫婦愛へと深まった過程——は既に見てきたところからも理解することができるし、その愛の深化発展が紫上の悲劇の深化拡大であったことも既述の通りである。それ故にこそ、密事後の女三宮に寄せる源氏の強い未練(二〇一〜二ペ)があるのである。物語の前半から展開された女三宮の現実的生活場面の描写を通して、読者はその過程をよく知っている。そのような現実的情況の中で起つた密通事件である

からこそ、この女三宮の現実的形而下的次元での思惟の構造が理解されるのである。おそらく作者はここに「女人の受苦の悲劇」あるいは「古代社会そのものの矛盾にみちた内面」を描き出そうとしているのであろうが、注意すべきことは、そのような悲劇は、悲劇そのものとして抽象的形而上的に在るのではなく、具体的な人間関係の場を通して生起するものであることを、作者は一つの文学形象として、女三宮を通して提示しようとしているのである。

さらにここで注目されることは、これまで殆ど外観的な印象批評によってのみ描写され続けてきた女三宮が、この事件を契機として、俄に内面的心理的描写を多くし、作中人物としての精確な造型を得てきたことである。本文引用は省くが、自己の過失を悔いて悩む条（一七六ペ）からの心理描写は著しく精密となり、「柏木」巻における宮の出家志願の条（二三三〜八ペ）に至ると、その内面的苦悩の深刻さは、量質ともにかつての紫上のそれに匹敵するほどのものである。これは単に女三宮像の造型の深化のみを意味しているのではない。ここに至って女三宮が、事件の当事者として、物語の主題の担い手として、主体的に自己の生を凝視しつつ生きはじめた人間として、それほど成長してきたことをもそれは意味しているのである。かつての六条院への降嫁からこの密通事件に至るまで、問題の四年間をはさんで実に七、八年の歳月が女三宮の上に流れた。その長い歳月の重みは、そのまま六条院の秩序の重みでもあり、宮が降嫁し、源氏と紫上という理想の一对を突き崩し、錯綜した人間関係による現実を受けとめ、その中で生活し、成長し、女人として苦悩し、主体的に生きはじめるようになるまでの、六条院にも女三宮に

も必要な時間の流れの総体としてここに懸ったのである。女三宮はその、時の重みに耐えて生きた。勿論、その強さは、朱雀院という強大な権力を背光とした、女三宮の幼稚な、白痴的な明るい性格が無意識のうちに半ば暴力として他に及んだところに生じた力強さであったことは言うまでもない。そしてその強さが周囲の人間関係を破壊するとき、そこにさまざまな悲劇が生じた。女三宮は、そのような深刻な悲劇を他にもたらし、自らも決定的な破局を体験しながら、そのような過程を通して、平安朝女性の典型として生き得たのであって、女三宮が出家を志すことによって主体的に生きはじめるまで、それらの悲劇的情況の深化過程が、必須の条件でもあったのである。

私はさきに、女三宮事件の唐突さに触れたが、ここで私は、そのような唐突さはこの物語の構想上の欠陥ではなくて、むしろ効果的な方法であるとさえ言いたい。何故なら、作者にとつて必要だったのは、徐々に成長し重い地位を占めてきつた女三宮の内面的世界を描き出すことであり、何かの事件を媒材として、女三宮を女として主体的に生きるための苦悩のさ中に突き落とすような、新しい情況の導入であつたのだ。その場合、その事件の内実はさほど重要な問題ではない。重要なのは、それによって女三宮が悲劇的な極限状況に立たされ、激しい苦悩を体験することによって生の内面を凝見するという展開部なのである。極言すれば、その事件は何でもよかつた。が、突然女三宮を襲つて深い傷を負わせるような、劇的な訪れを必要としたのである。女三宮にとつて、密通そのものの罪の問題、真実な愛の探求という内実が問われないで、その

行為の現実世界に及ぼす結果についての不安や怖れが重大な問題となっていたのも、そのためである。その不安や怖れが、やがて愛の苦悩となり、生の探求となり、求道となる心の内面の暗い戦いこそが作者の描き出そうとする女三宮の本来像であり、物語の主題でもある。密通事件はそのための単なる媒材に過ぎない。あるいはそれは密通でなくても、また、密通を仮に前提として、その相手がたえ柏木でなくても、物語の本質はさほど変わってきはしなかったであろうと、私は想像することができる。

五、結び

以上の考察によって、私は、女三宮事件の物語を前半から後半にかけて統一的全体的に把握できることを知った。それは、女三宮降嫁事件と柏木密通事件の物語を別々の主題の物語として裁断する見解を否定する立場からの考察であるが、勿論、「若菜」以後において紫上が果す役割を軽視するものでは毛頭ない。紫上も女三宮も、第二部の悲劇的世界においていづれも重要不可欠の人物である。ただ私は、それら二人の女性の悲劇が、単純に前半後半で切り離されているのではなく、両者の相互の絡み合いの過程を通して形成された悲劇の構造を強調したかったのである。源氏物語は第二部に入ってから、明らかに「女人の受苦の悲劇」の主題に重点をおきはじめている。第三部における大君の結婚拒否、浮舟の悲劇などが、第二部における悲劇の原質の発展的方向に造型された世界であることはほぼ確実である。女三宮もそのような主題を担った、重要な人物の

一人として評価されなくてはならない。

(本文の引用は朝日新聞社版源氏物語四に拠った。紙数の関係上、本文や参考論文の引用を最小限度にとどめたことをお断わりする。)

(昭・45・10稿)

注1 阿部秋生氏「源氏物語研究序説」(昭34・4)

注2 秋山 虔氏「若菜」巻の始発をめぐって(昭39・12)、野村精一氏「源氏物語の思想と文体」(「日本文学」昭

36・8)

注3 今井源衛氏「女三宮の降嫁」(「文学」昭36・6)

注4 野村精一氏「若菜上」(「国文学」昭41・6)

注5 松尾聡氏「女三宮—その人間と意味するもの—」(「国文学」昭32・5)

注6 森一郎氏「女三の官降嫁の事件」(「国文学攷」(広島大学)昭45・5)

注7 小町谷照彦氏「女三宮」(「国文学」昭43・5)

注8 石田稷二氏「若菜の巻について」(「国語と国文学」昭30・11)、注6の森氏のご論文参照

注9 大朝雄二氏「若菜巻をめぐっての一考察—源氏物語の構造についての試論—」(「藤女子大文学部紀要」第一号、昭

41・6)

注10 高橋和夫氏「源氏物語年紀攷」(「群馬大学文学部紀要」昭34)

注11 高橋和夫氏「若菜巻始発における主題の意味」(「国文学」昭39・5)

注12 注8に同じ

注13 注9に同じ

注14 今井源衛氏「柏木と女三宮」(「国文学」昭34・8)、野村精一氏「若菜巻試論——人間関係の悲劇的構造について」(「国語と国文学」昭35・3)、深沢三千男氏「女三宮物語の基本構造」(「国語国文」昭39・10)

注15 森一郎氏「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(「国語国文」昭40・4)、注14の深沢氏のご論文

注16 石田穰三氏「柏木と女三宮」(「国語と国文学」昭26・12)

注17 森一郎氏「女三の宮事件の主題性について」(「国語国文」昭35・11)と野村精一氏の注14のご論文

「若菜」巻についての一考察——女三宮物語における基本的問題の再検討——